

### 第3章

## 水産資源

### まき網漁業の概要

境漁港は浮魚水揚げ量が全国的に見ても多く、その大部分が「まき網漁業」によるものです。漁船の大きさ（トン数）により「大中型まき網」と「中型まき網」に分けられ、主に鳥取・島根の大中型と島根（隠岐）の中型が水揚げをしています。夏のマグロのシーズンには、石川、長崎、東京等の船団も加わり、より一層にぎやかになります。

【魚種】 マアジ、マサバ、イワシ類、ブリ、クロマグロ等

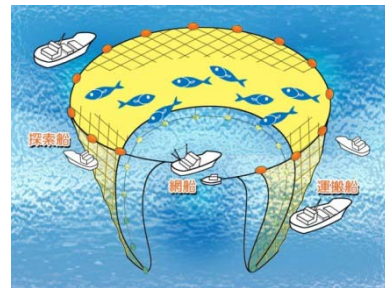
【漁場】 隠岐・浜田周辺：アジ、サバ、イワシ類など

日本海中西部：ブリ、クロマグロ

【隻数】 境港に水揚げする主な船団数

大中型：4船団 中型：8船団

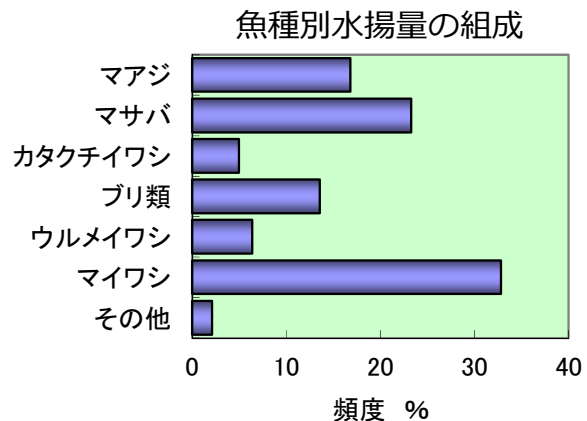
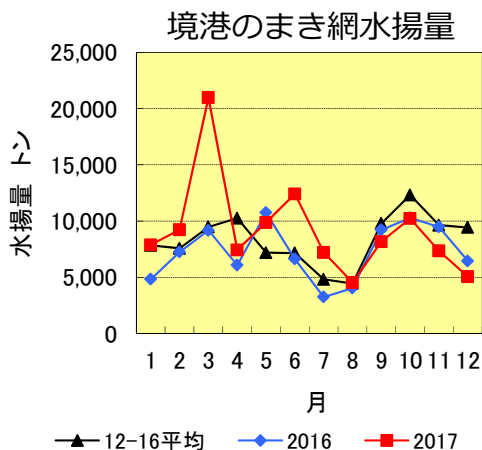
※マグロの時期は船団数も増加します。



【漁法】 「まき網漁業」は長方形の大型の網を円形状に張って行き、魚群を取り囲む漁法で、船型の異なる複数の船が船団を組んで操業を行います。大中型まき網の場合は、一般に網船1隻、探索船2隻、運搬船2隻の合計5隻で1船団が構成されています。

### 水揚げの状況

平成29年の境港におけるまき網漁業全体の水揚げ量は110,320トンでした（前年比：126%（前年87,358トン））。魚種別にはマイワシ（33%）が最も多く、次いでマサバ（23%）、マアジ（17%）、ブリ類（14%）の順となっていました。季節的な変化を見ると、特に3月はアジ、サバ、イワシ類が順調に漁獲されたことから、単月で20,000トンを超える例年にない水揚げ量となりました。



## 現状の課題と解決に向けた取り組み

### マアジ資源の持続的な利用

2017年の境漁港におけるマアジの水揚量は18,555トンとなり、1996年以来、約20年ぶりに2万トンを下回りました。本年の水揚量減少の要因として当歳魚の水揚げが少なかったことが挙げられます。例年、マアジ当歳魚は秋期に多獲される傾向にあるのですが、本年秋期は多くの船団がマイワシを水揚げしており、マアジはほとんど見られませんでした。マアジが少なかったのは加入量が少なかったのか、船団の狙いなのか現時点では判然としません。いずれにせよマアジは小さいうちではなく大きく成長してから水揚するほうが単価の向上につながるため、小さなマアジを取り残していくことが重要です。現在、日本海西部、九州西海域マアジ広域資源管理指針に基づき、小型魚の漁獲が多い時期の休漁や漁獲回避のための漁場移動などの漁獲努力量削減の取り組みが行われています。



マアジの水揚げの様子

### 鮮度の良い魚をお届けする ～養殖ギンザケの鎮静化～

美保湾におけるギンザケ養殖は、2011年の養殖開始以降、年々生産量が増加しています。ギンザケは活け締めをする直前に魚を鎮静化させる必要があり、これまで人の手でたたく作業を行ってきました。そのため、見た目が悪いことや人手がかかることが課題となっていました。



養殖ギンザケの活け締め作業の様子

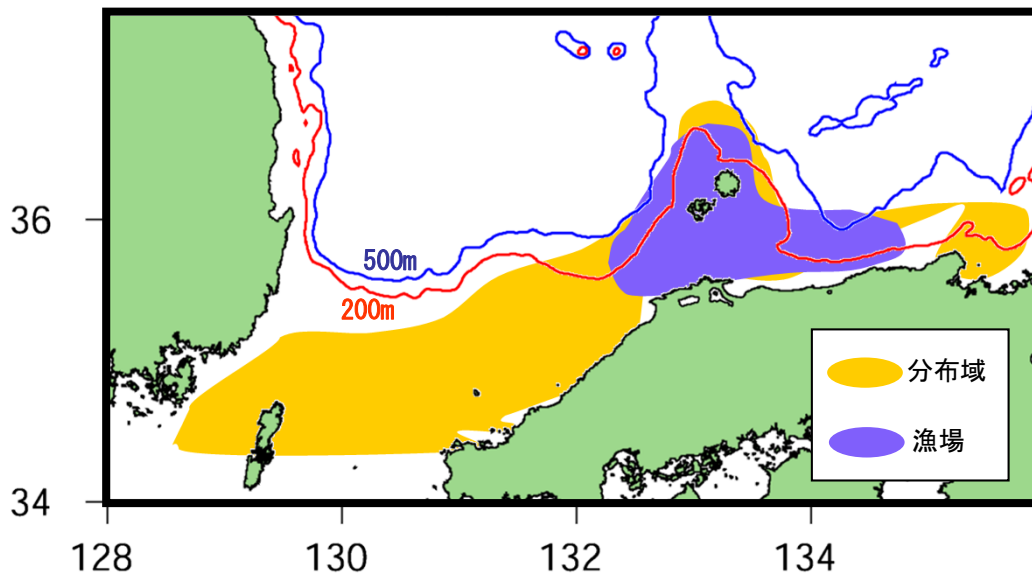
そこで、水産試験場では、鎮静化作業の効率化を目的に米子工業高等専門学校と共同で鎮静化機械の開発に取り組んできました。機械の開発により作業の省力化が図られるとともに大量処理が可能となりました。

# マアジ (市場名 ヒ)



## 生態

**【分布】** 南シナ海～北海道まで各地。日本海側では長崎県、島根県の漁獲が多い。  
群れで生活することが多く、沿岸から沖合の主に浅所を遊泳する。  
昼は海底近くにいるが、夜になると海の表面近くまで上がってくる。

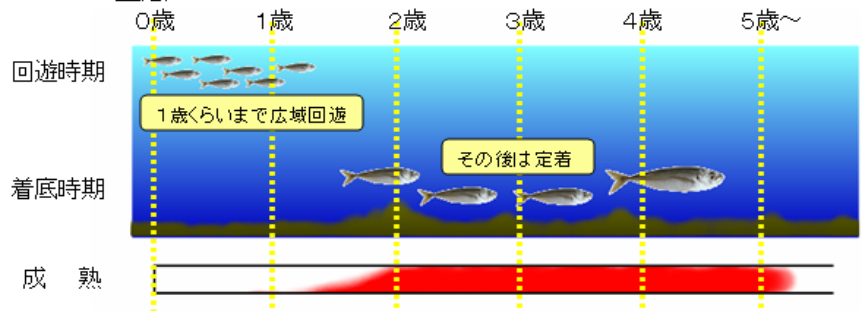


**【成長】** 通常、寿命は5歳、40cm。最大50cm程度まで成長する。

**【成熟と産卵】** 早いもので1年、概ね2～3年で成熟する。西日本の産卵期は1～6月。通常、南ほど早く、盛期は3～5月。東シナ海、九州沿岸、日本海沿岸で直径約1mmの卵を産む。

**【食性】** シラスなどの小魚や小型甲殻類などを摂餌。

マアジの生態



## 漁業の特徴

**【漁法】** 鳥取県では主に大中型まき網により漁獲される。沿岸域では定置網漁業、刺網漁業による漁獲が多い。

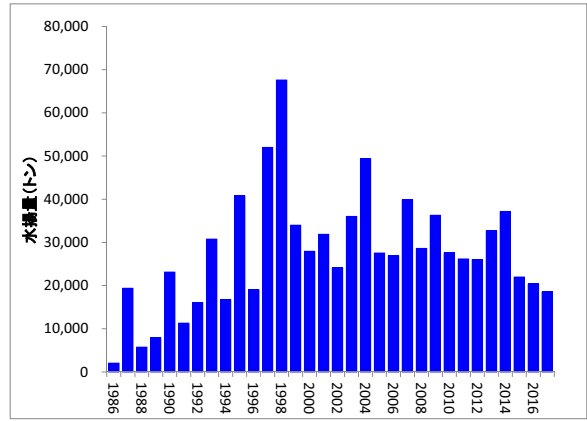
**【漁期】** 周年漁獲される。鳥取県周辺では初夏のころに脂がのる。

## 水揚量と資源状況 中位減少



水揚量は1980年代までは低い水準でしたが1990年以降は増加傾向を示し、1998年に67,611トン記録しました。2018年は18,554トンで前年に引き続き水揚量が減少しました。2万トンを下回ったのは1996年以降の事です。

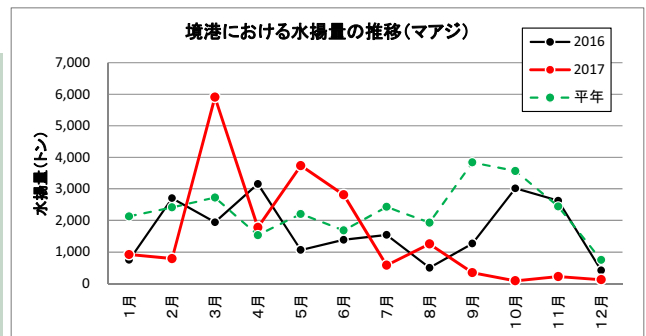
水揚の主体は1歳魚（2016年級群）で、例年と異なり0歳魚の水揚はわずかでした。



境港における旋網年間水揚量の推移

## 資源を大切に使うための取り組み

水産試験場では、島根県や水産教育研究機構と共同で、日本海西部海域におけるマアジ幼魚の来遊量調査を実施しています。新たに漁獲対象となる幼魚の量は、来遊量の多かった2003年を加入量指標値1とすると2017年は2.72（折れ線グラフ）となり、良好な状況が予想されました。実際に2017年のまき網1ヶ続あたりの当歳魚漁獲尾数は2016年を上回りましたが（棒グラフ）、当歳魚の主漁期である9~11月にはマイワシを水揚げする船団が多く、当該期間におけるマアジの水揚量は近年で最も少ない結果となりました。このことは、2017年生まれの個体がそれほど多くなかった



境港における月別旋網水揚量の比較

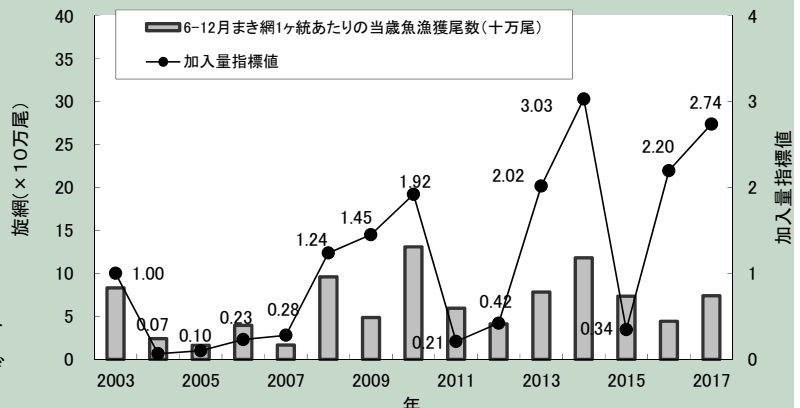
可能性を示唆する一方、まき網船団の狙い魚種が変更された、すなわち多獲性魚類の優占種がマアジからマイワシに変わりつつある可能性も示唆します。

当歳魚の漁獲尾数が少なかったことから、成長した個体の水揚げが増えることを期待したいです。



中層トロール調査

調査でとれたアジ



マアジ幼魚の加入量の経年変化

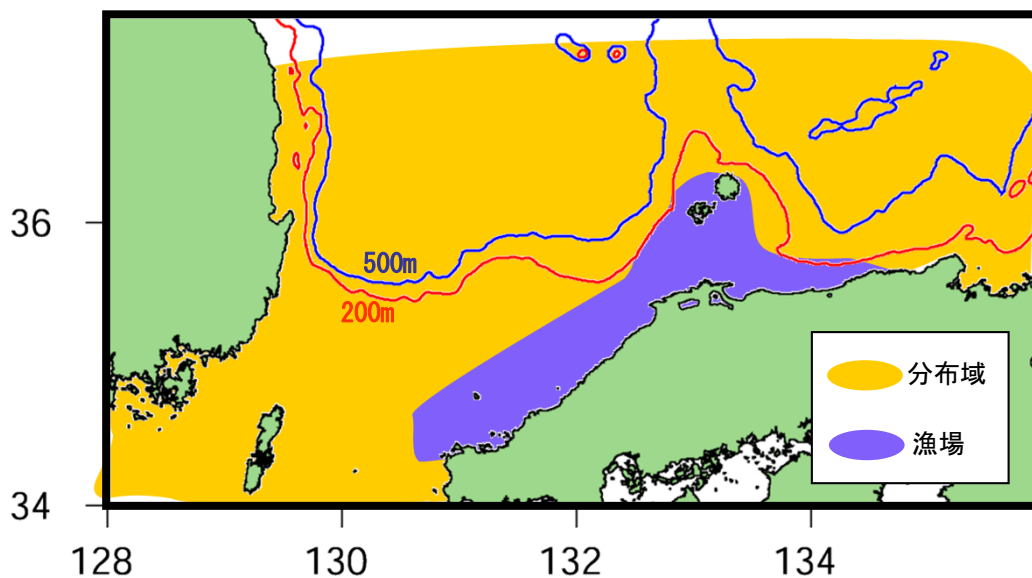
## マサバ (市場名 メ)



### 生態

【分布】 日本周辺の沿岸～沖合域。

日本海側の系群は夏期に索餌のため北上し、秋期から冬期に産卵・越冬のため南下するとされる。



【成長】 寿命は6歳で、50cm程度まで大きくなる。

【成熟】 成熟年齢は1歳で半数、3歳で完全に成熟する。春期に東シナ海から日本海の沿岸域で産卵する。

【食性】 カタクチイワシ等の魚類やオキアミ、アミ、カイアシなどの甲殻類を摂餌。

### 漁業の特徴

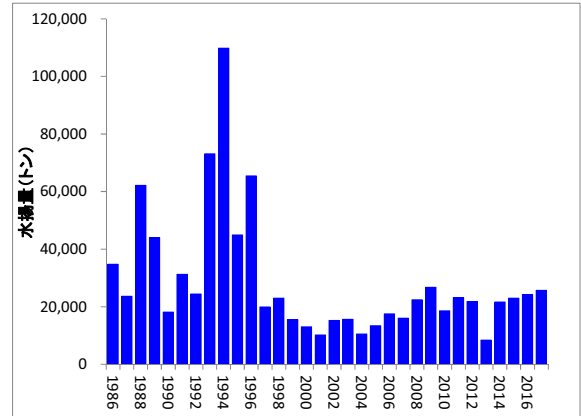
【漁法】 鳥取県では大中型まき網、一本釣、刺網漁業により漁獲される。水揚量のほとんどはまき網による。

【漁期】 まき網では、秋から冬に多く漁獲され、刺網では春に漁獲される。

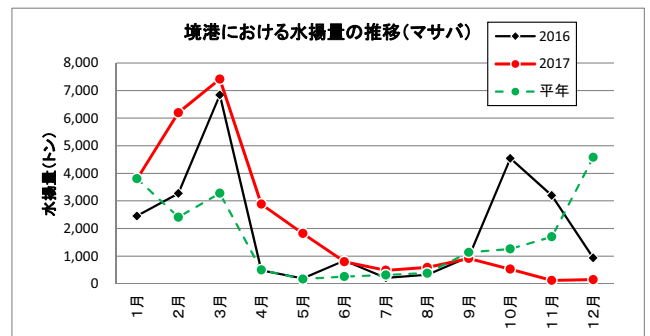


## 水揚量と資源状況 低位増加

水揚量は1993年から1996年までは若齢魚を主体に増加しましたが、1997年以降は減少し、現在まで低水準で推移しています。近年は、2014年を除けば、0歳魚、1歳魚を主体とした2万トン程度の水揚げとなっています。2017年の水揚量は25,683トンで、2016年を約1,421トン上回りました。上半期の水揚げが好調で4、5月にもまとまった漁獲があった一方、例年水揚げの多い11月以降ほとんどサバ類は見られませんでした。



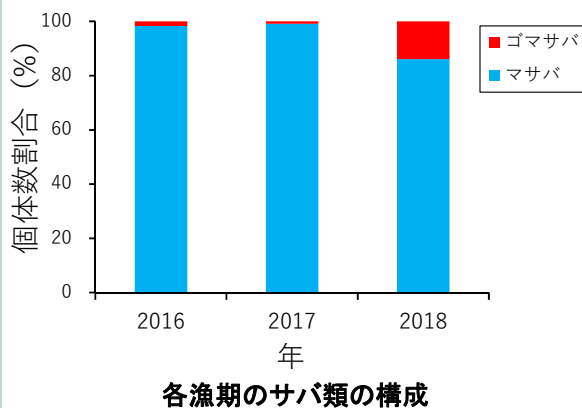
境港における旋網年間水揚量の推移



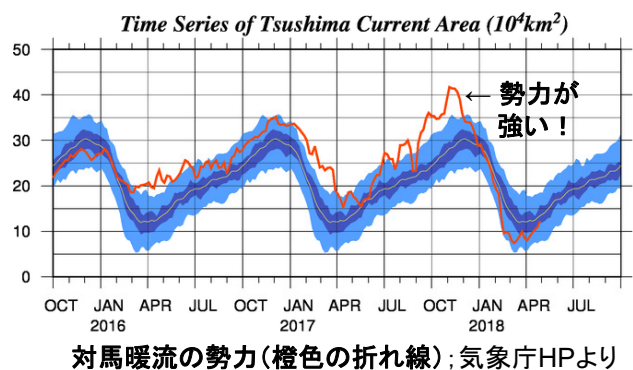
境港における月別旋網水揚量の比較

### ゴマサバの増加は温暖化の影響？

日本周辺のサバ類には冷たい海域で多いマサバと暖かい海域で多いゴマサバの2種がいます。見た目のよく似た両種ですが、体長（尾叉長）と背鰭の棘条間隔（基底長）との比で判別することが出来ます。境漁港は比較的水温の低い日本海に面していることから、ゴマサバは少なく、水揚げのほとんどがマサバです。ところが2018年1～3月に大漁だったサバ類の中には、ゴマサバが例年よりかなり多く含まれていました。暖かい海域に生息する種が増える、すなわち海域の温暖化が疑われるわけですが、本年については夏から年末まで対馬暖流の勢力が強かったことから日本海へ進入するゴマサバが多かったものと思われる。温暖化とは長期的な傾向、変動であり、単年の事象のみで判断することは出来ません。サバ類の構成からその判断をするには、体長や鰭条間隔などのデータを地道に蓄積してき、合理的に現状を把握することで出来るのだと考えます。



各漁期のサバ類の構成



対馬暖流の勢力(橙色の折れ線); 気象庁HPより

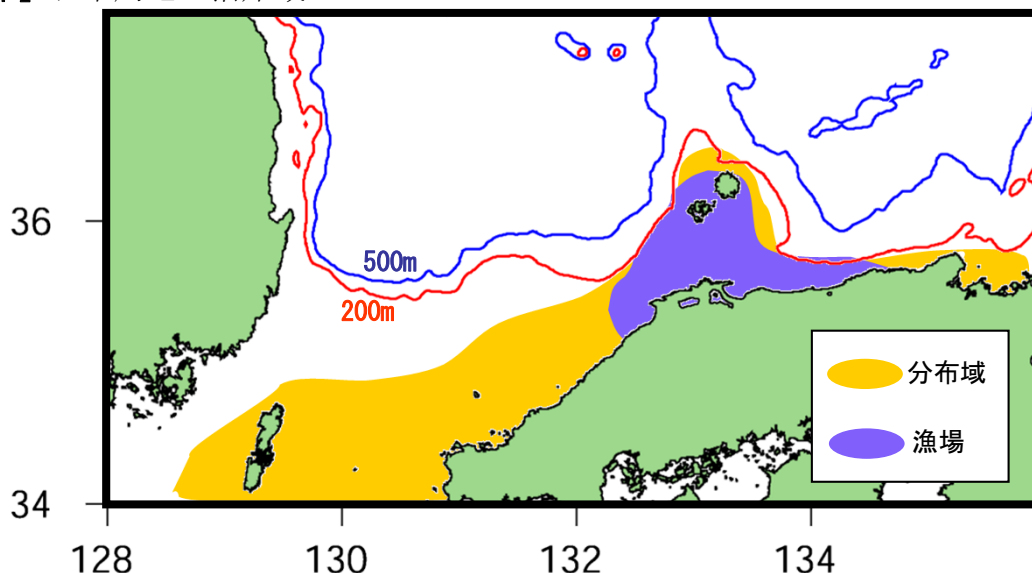
## まき網漁業

# カタクチイワシ (市場名タレ)



## 生態

【分布】 日本周辺の沿岸域



【成長】 寿命は2歳、15cmくらいまで大きくなる。

【成熟】 満1歳で成熟し春期と秋季に東シナ海から日本海各地の沿岸域で産卵する。

【食性】 カイアシ類などの動物プランクトンを主に摂餌。

## 漁業の特徴

【漁法】 成魚は主に隠岐諸島のまき網により漁獲され、境港に水揚げされる。一方、シラス（稚魚）や幼魚は船びき網、すくい網などにより沿岸で漁獲されている。

【漁期】 周年水揚げされるが、春と秋に多く水揚される。春に水揚される個体のほとんどが体長の大きな産卵親魚である。



船曳網の水揚げ風景

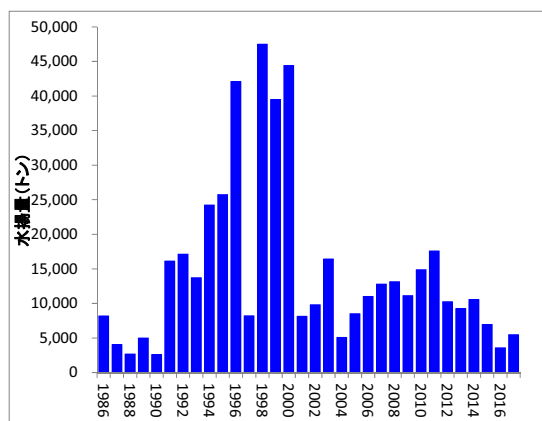


カタクチイワシのシラス

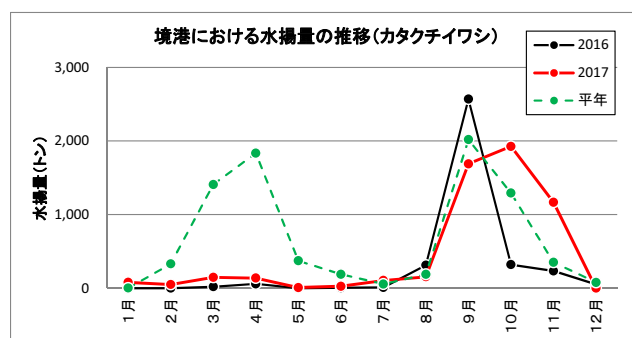
## 水揚量と資源状況 低位減少



2001年以降は中位水準で推移していましたが2013年に低位減少に見直されました。2010年以降、顕著な減少傾向にあり、2017年の水揚量は5,493トンと、1990年以降で最も少なかった2016年よりも2,000トン弱増加したものの、依然低い水準で推移しています。近年の傾向として、春期の水揚量が極端に少ないことがあげられます。



境港における旋網年間水揚量の推移



境港における月別旋網水揚量の比較

## 資源を大切に使うための取り組み

毎年3月から6月にプランクトンネットを使って、卵と稚仔の分布調査を行っています。調べる種類はイワシ類・イカ類・アカガレイなどです。サンプルを顕微鏡でのぞくと、4月と5月に米粒のような楕円形の卵を多く見ます。この卵はカタクチイワシの卵です。このカタクチイワシの卵や稚仔を数えて、今後の資源動向を調べています。



カタクチイワシの卵



顕微鏡をのぞくと、お米をばらまいたように見えます。



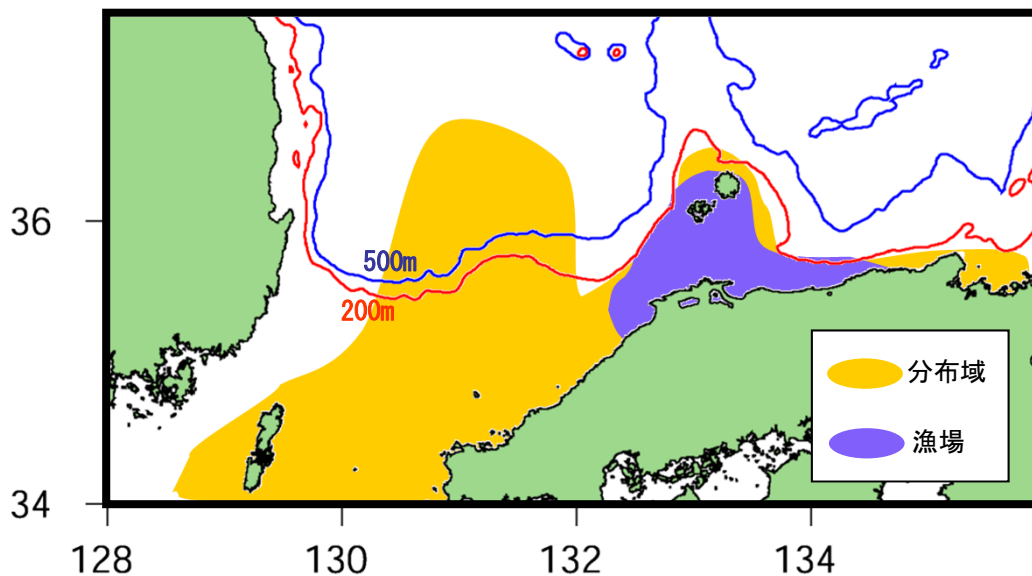
## マイワシ (市場名 ツ)



### 生態

**【分布】** 数十年周期で資源水準が大きく変動し、それによって分布範囲が異なる。

低水準期には日本各地の沿岸域。高水準期には日本近海を中心に東シナ海、オホーツク海などにも広がる。索餌や産卵に伴う南北の大規模な回遊も見られる。



**【成長】** 寿命は通常7歳で、25cmくらいまで大きくなる。まれに30cmまで成長。

**【成熟】** 1～2歳で成熟する。春期に東シナ海から日本海の沿岸域で産卵する。

**【食性】** カイアシ類や珪藻類などのプランクトンを摂餌。

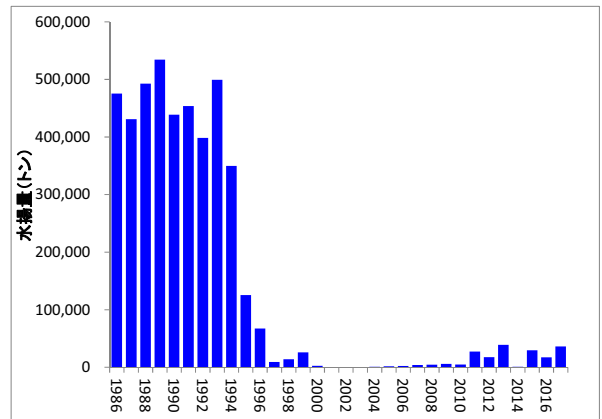
### 漁業の特徴

**【漁法】** 鳥取県では、主に隠岐諸島のまき網により漁獲されたものが、境港へ水揚げされる。

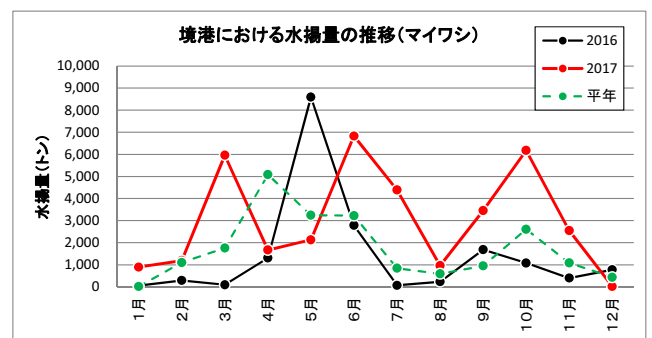
**【漁期】** まき網では、春に成魚が、秋に当歳魚が多く漁獲される。

## 水揚量と資源状況 中位横ばい

1990年代後半から資源が低位水準にあったマイワシ資源ですが、近年は増加傾向にあります。水揚量は2011年に27,659トンと1万トンを超えたことを皮切りに、2013年まで3年連続で数万トンの水揚げが続きました。2014年は一転して965トンと水揚量が大きく減少しましたが、翌2015年には29,637トンと再び増加し、以降数万トンの水揚げが続いています。2017年は年間を通じて水揚げがみられ、36,234トンとなりました。2014年に水揚量が激減したことは、資源量の減少よりも回遊経路の変化などが影響していると推察されていますが、詳細については不明で検討課題となっています。



境港における旋網年間水揚量の推移



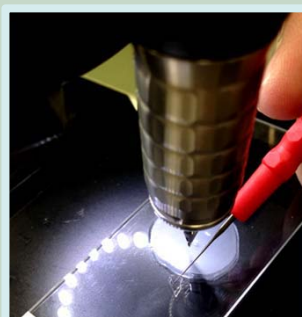
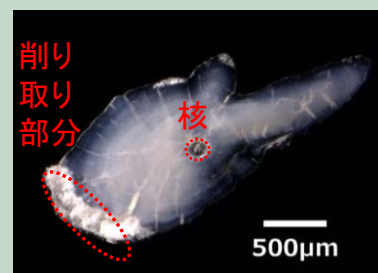
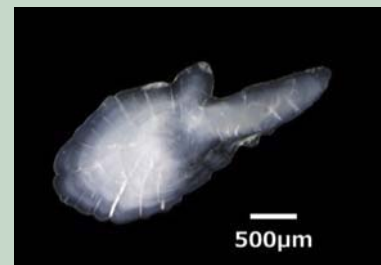
境港における月別旋網水揚量の比較

### マイワシの回遊生態を解明するための取り組み

魚類の頭部には耳石（じせき）と呼ばれる平衡感覚を保つための器官が存在します。魚類の年齢や日齢を調べるために耳石はよく用いられます。

また、近年では耳石の微量成分を分析することで、その魚が生息していた環境履歴（塩分、水温など）を再現することが出来るようになり、このことを応用して日本海のマイワシの回遊生態を解明できないか検証しています。

### マイワシの耳石



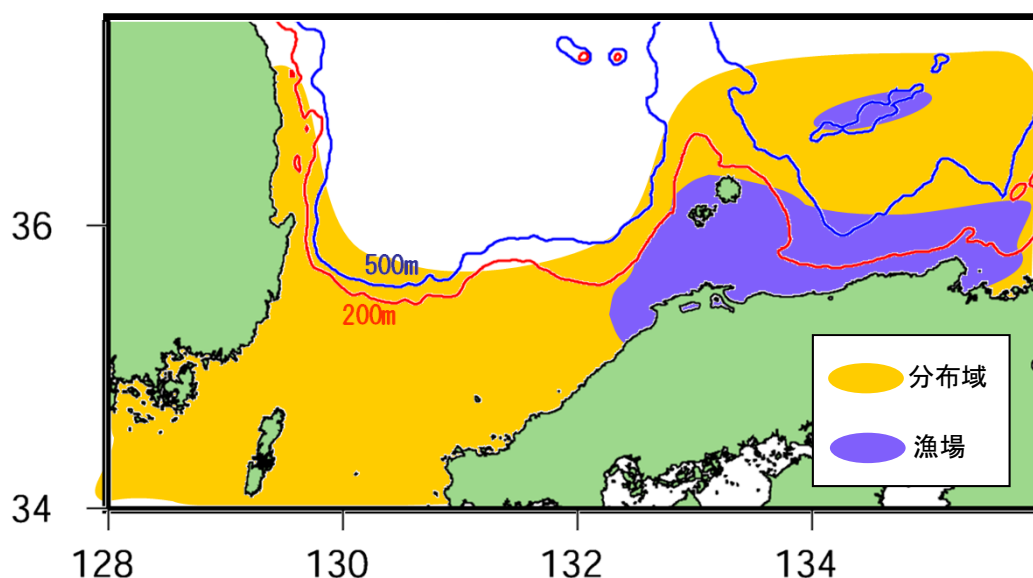
マイクロドリルを用いて耳石の微少領域を削り出し、成分を分析。

# ブリ (地方名 (出世魚) つばす→はまち→まるご→ぶり)



## 生態

【分布】 日本周辺の沿岸～沖合域 (よく似たヒラマサは全世界の温帯・亜熱帯に分布)



【成長】 寿命は7歳前後で、大きなものは115cm、20kg以上に成長する。

成長は早く、1歳で40cm (1.0kg)、3歳で70cm (4.5kg) 程度まで大きくなる。

【成熟】 概ね3歳で成熟する。産卵場所は東シナ海の陸棚縁辺部が中心と考えられている。産卵期間は長く1～6月まで続く。

【食性】 稚魚は初期にはカイアシ類などの動物プランクトンを摂餌し、3cm程度に成長すると魚類を食べ始める。13cm以上になると、カタクチイワシ、スルメイカなどの魚介類を主体とするようになる。

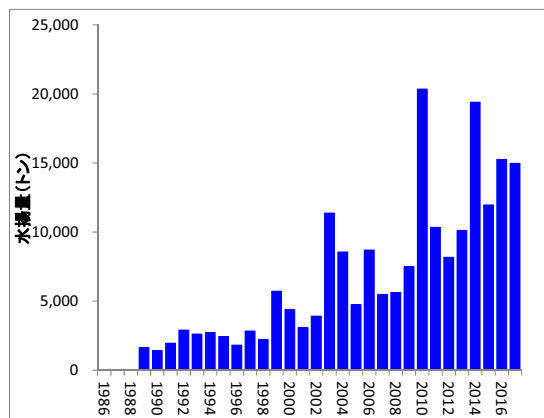
## 漁業の特徴

【漁法】 鳥取県では、主に沖合の大中型まき網により漁獲される。沿岸においても刺網、定置網、一本釣により利用されており重要な魚種となっている。

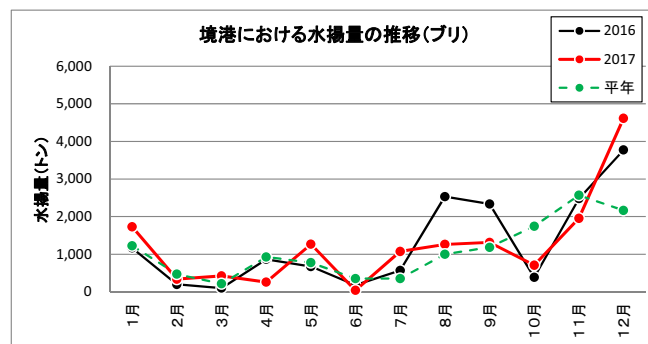
【漁期】 まき網では、12～翌1月に多く漁獲される。沿岸ではやや小型 (5kg未満) のものが周年漁獲される。

## 水揚量と資源状況 高位増加

水揚量は1990年代までは5千トン以下で推移していましたが、2000年代以降は増加傾向が続いています。2017年は14,976トンで、2016年の15,253トンと同程度の水揚げとなりました。2017年は12月の水揚量が顕著に多いことが特徴的でした。同月にサバ類の漁獲が少なかったことから、例年、サバ類を狙っていた船団がブリ狙いに切り替えたため水揚量が多かった可能性があります。



境港における旋網年間水揚量の推移



境港における月別旋網水揚量の比較

### 重要性を増すブリ類の持続可能な利用

近年見られるブリの増加は、海の温暖化による資源量の増大や分布域の拡大によるものと考えられています。境漁港へ水揚げする旋網船団においては、小型浮魚類（アジ・サバ・イワシ等）に比べ単価が高いブリの水揚げが漁業経営上重要となっています。ブリは広範囲を回遊する魚で、水揚量の多い旋網以外にも本県の沿岸漁業や日本海北部の定置網漁業においても重要な漁獲対象種です。日本海ではブリを漁獲対象とする漁法が多く、そのため本種の持続可能的利用は今後必須となります。水産試験場としては水産研究教育機構や他県の方々とも連携しながらブリ類の資源管理に取り組んでいきたいと考えています。

# くろまぐろ

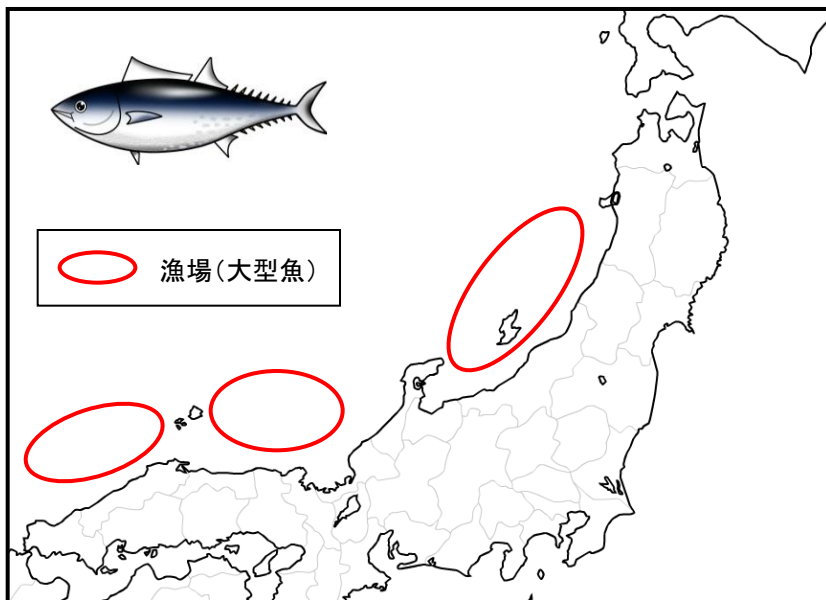
*Thunnus orientalis*

地方名 マグロ、本マグロ



## 1 生態

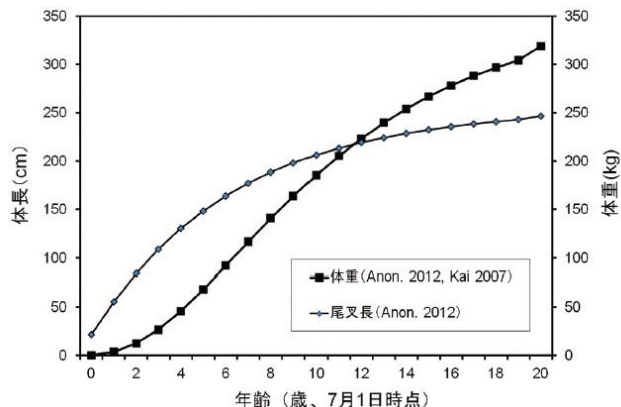
【分布】日本周辺をはじめ、太平洋の温帯域に広く分布する。



【成長】寿命は20歳以上と言われ、最大のもので体長が3m、体重400kg近くまで成長する。

【成熟】体長1mを超える3歳頃から成熟が始まり、日本南方～フィリピン沖では4～7月に産卵し、日本海では6～8月に産卵する。

【食性】日本海では、スルメイカやカタクチイワシなどの小型浮魚類を食べていることが多い。



## 2 漁業の特徴

【漁法】大中型まき網で漁獲され境港に水揚げされる。

【漁期】大型魚（成魚）は6～7月に漁獲される。資源管理のため2015年から8月は操業自粛としている。

太平洋クロマグロの尾叉長・体重と年齢との関係  
(平成27年国際漁業資源の状況 水産庁・水産研究・教育機構より)



### 3 水揚量と資源状況

・2017年の境港におけるクロマグロの水揚量は大型魚（成魚）が1,036トン（前年1,417トン）、小型魚（未成魚）のヨコワが18トン（前年508トン）でした。

・6～7月に漁獲された大型魚の組成は、尾叉長（体長）120cm程度（体重約35kg）、145cm程度（約60kg）、165cm程度（約85kg）、185cm程度（約120kg）の4つのモードが確認されました。

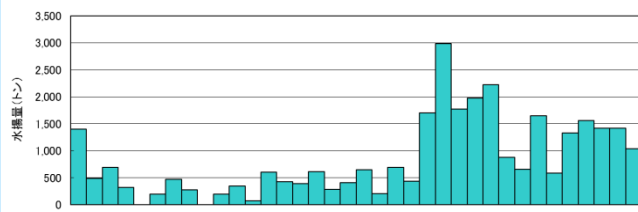
・近年、境港では安定的に水揚げされていますが、国による太平洋クロマグロの資源評価では、現在の親魚資源量は過去最低のレベル付近とされています。

・そのため、我が国では太平洋クロマグロの資源増大を図るため、中西部太平洋まぐろ類委員会（WCPFC）の勧告に基づく資源管理措置（自主規制）を2011年から実施し、2018年からは法に基づく数量管理（TAC）に移行して引き続き取んでいます。

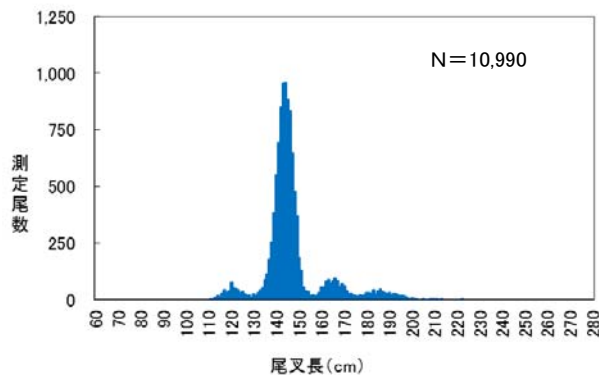
・具体的には2015年から小型魚の漁獲量を大幅に削減し、大型魚では2011年より日本海で操業する生産者が自主的に漁獲量の上限を設定しています。

・水産研究・教育機構の調査等から2014年生まれ（4齢）は資源量が少ないと考えられています。2015年生まれ（3歳）と2013年生まれ（5歳）は、漁場形成の有無にもよりますが、一定の水揚げが見込めると考えられます。

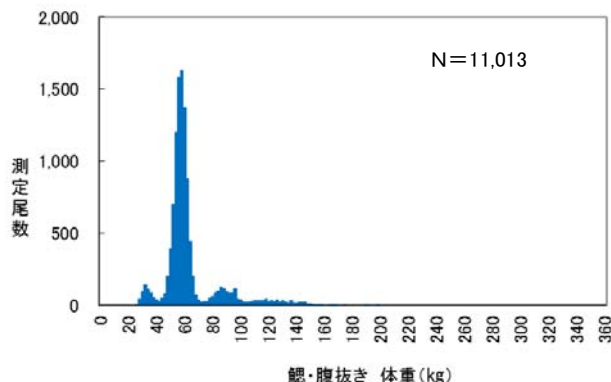
資源状況  
低位横ばい



境港における水揚量の推移(大型魚)



尾叉長(体長)組成(2017年大型魚)



体重組成(2017年大型魚)

### 4 資源を大切に使うための調査や取り組み

水産試験場では、市場へ水揚げされたクロマグロの体長測定や産卵を確認するための卵巣組織採集を行うとともに、平成22年度より、国や他県と共同で産卵場調査（ネット曳きによる生まれて間もない仔魚採集）を行っています。

また、より高鮮度なクロマグロを生産するために、平成21年度に作成した「クロマグロやけ肉軽減マニュアル」も引き続き説明普及を図っています。



クロマグロの仔魚

(H22年7月)

試験船第一鳥取丸で採集)



市場での体長測定

## イカ釣り漁業の概要

夜間に集魚灯に集まったイカを自動イカ釣り機により擬餌針で釣り上げます。

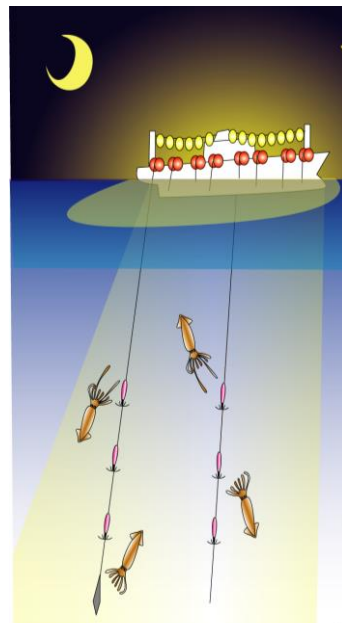
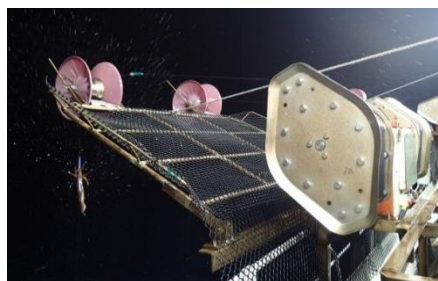
沿岸で日帰り操業する10トン未満漁船と、イカの回遊にあわせ日本海各地で操業する19トン型漁船があり、本県沿岸域でも夜間に陸から海を眺めると操業するイカ釣り漁船の灯り（漁り火）で幻想的な光景が見られます。

【魚種】 スルメイカ、ケンサキイカ（白いか）

【漁場】 10トン未満漁船→鳥取県沿岸

19トン型漁船（小型イカ釣り漁船）

→東シナ海及び日本海全域



## 現状の課題と解決に向けた取り組み

イカ釣り漁業は、大きな集魚灯を利用して操業しているため、他の漁業より燃油を多く必要とし、燃油価格の高騰が漁業経営を圧迫しています。また、近年、漁場が沖合域に形成される傾向にあり、沿岸域に漁場が形成されにくくなっています。

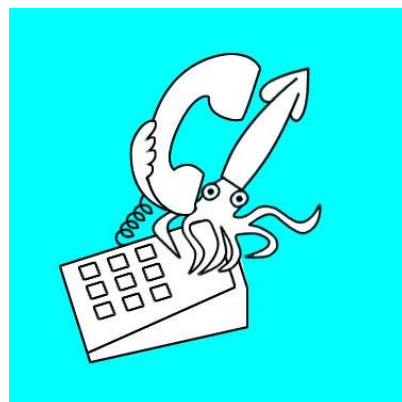
鳥取県では燃油高騰対策として、スルメイカが山陰沖を北上する春と南下する秋に、第一鳥取丸を用いてスルメイカの漁場探査調査を実施しています。そして、調査結果を、速やかに漁協にFAX送信することで操業の効率化を図っています。

## 電話で情報をゲット！！

漁業者に他県の水揚げ状況を知って頂くために、電話応答専用の「白いか（ケンサキイカ）、しまめいか（スルメイカ）漁況案内」を行っています。白いかは、長崎県及び兵庫県の水揚げ状況をお知らせしています。しまめいかは、境漁港の水揚げ状況をお知らせしています。

## 電話番号

**0859-45-4505**



# するめいか

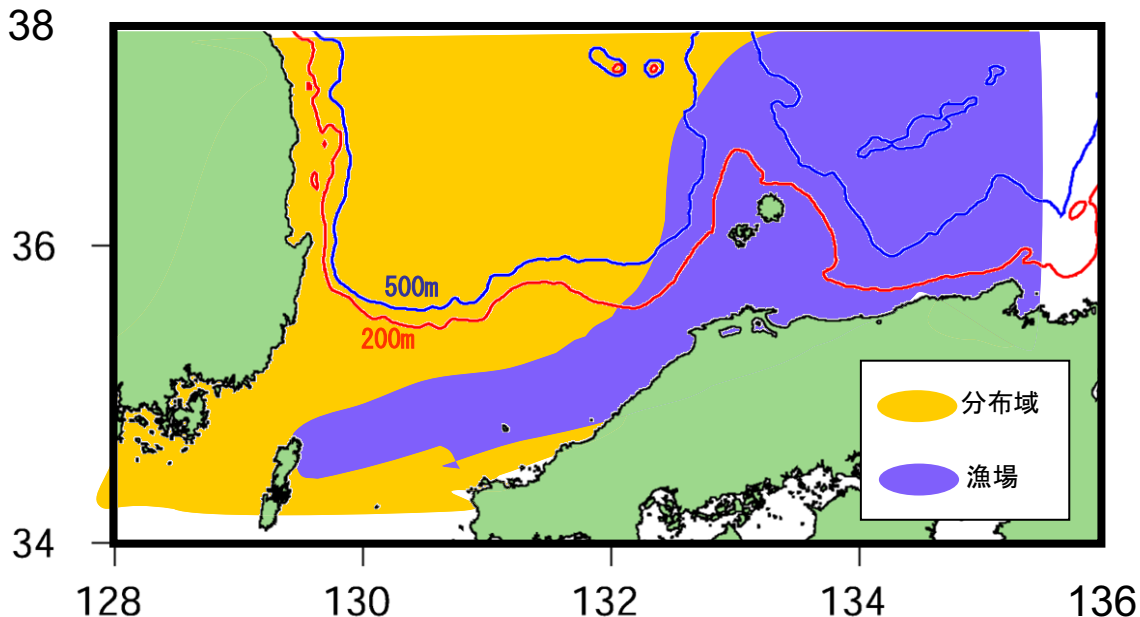
*Todarodes pacificus*

地方名 シマメイカ



## 1 生態

**【分布】** 日本周辺に広く分布しており、主に日本海側には秋生まれ群が、太平洋側には冬生まれ群が来遊している。



**【成長】** 寿命は約1年で、大きいもので約30cmまで成長する。

**【成熟】** 雄は約9カ月、雌は約11カ月で成熟する。

系群	産卵期	産卵場
秋季発生系群	10～12月	北陸沿岸～東シナ海
冬期発生系群	12～3月	主に東シナ海

**【食性】** 動物プランクトンや、キュウリエソ等を食べる。

## 2 漁業の特徴

**【漁法】** 主にイカ釣により漁獲される。

**【漁期】** 日本海では1月～3月上旬は前年の冬に生まれ、主産卵場へと南下回遊するスルメイカ（冬季発生系群）が主に漁獲される。また、3月中旬以降は前年の秋頃に生まれ、日本海沿岸部を北上、10月以降に主産卵場へと南下回遊するスルメイカ（秋季発生系群）が漁獲される。

### 3 漁獲量と資源状況

鳥取県船（10トン未満漁船、19トン型漁船）の漁獲量はスルメイカが1,217t（前年比78%）で漁獲金額は7.6億円（前年比83%）となりました。全国的なイカの不漁傾向から単価が上がり、金額は漁獲量程大きな減少は認められず、2015年同様の結果となっています。

境港のスルメイカ水揚量は2002年まで高い水揚げが続いていましたが、近年は減少傾向に有り、ピーク時の1/3以下となっています。

2017年の境港における水揚量は58.9トン（前年比10.1%、平年比0.025%）で前年、平年を下回り、集計を開始した1971年以降で最低値を示しました。月別の水揚量は、主漁期となる春季及び秋季においても増加せず、年間を通して低調に推移しました。

低調傾向は西部日本海地区全体で認められ、資源量が低下傾向であることに加えて、回遊経路が漁獲好調期から変化したことなどが原因だと考えられます。

秋生まれ群

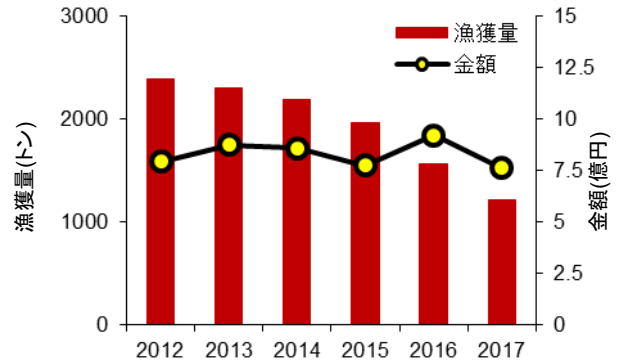


資源状況  
中位減少

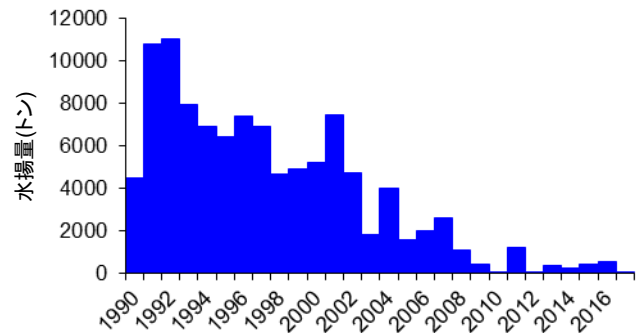
冬生まれ群



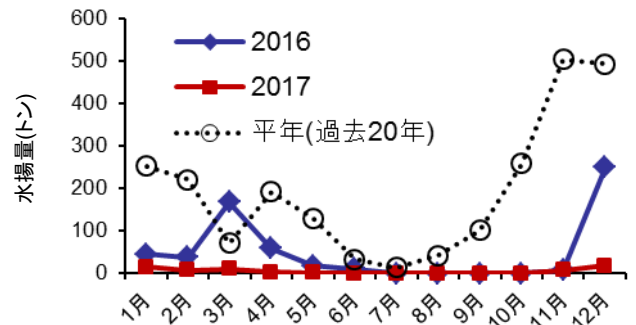
資源状況  
低位減少



鳥取県における漁獲量・金額の推移



境港における年間水揚量の推移



境港における月別水揚量の比較

### 4 資源を大切に使うための調査や取り組み

イカ釣り漁業は燃油価格高騰の影響を強く受ける漁業です。また、上記に加え、スルメイカの資源量減少、漁場の沖合化によりイカ釣り漁業は非常に厳しい状況にあります。

鳥取県では燃油高騰対策として、スルメイカが山陰沖に来遊する春と秋に、第一鳥取丸を用いたスルメイカの漁場探査調査を実施しています。釣獲したスルメイカから、分布密度や大きさを調査し、結果を、速やかに公表することで操業の効率化を図っています。



漁場探査調査中の測定風景



# けんさきいか

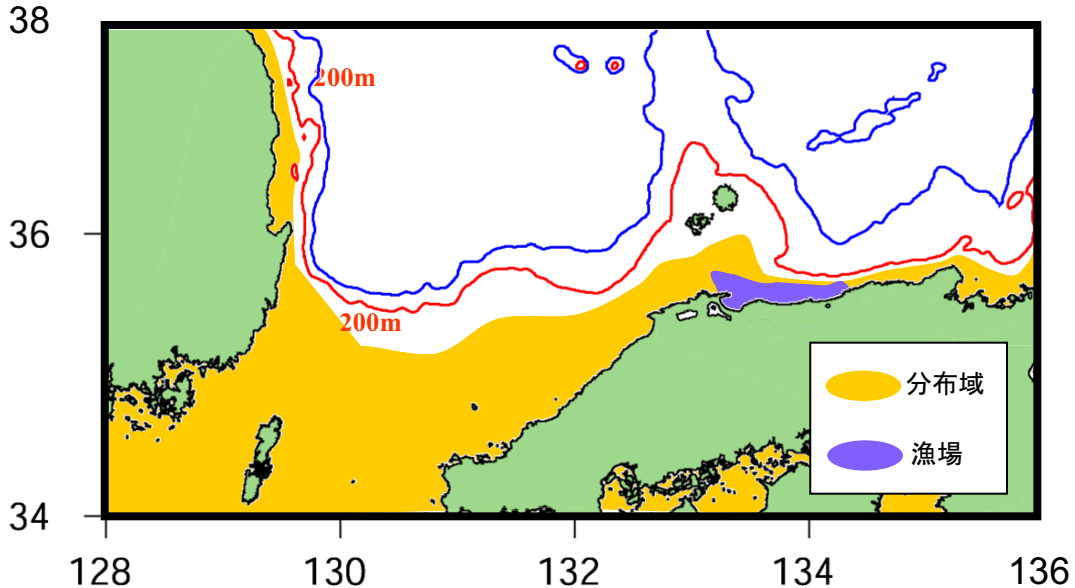
*Uroteuthis edulis*

地方名 白イカ



## 1 生態

【分布】青森県以南の本邦沿岸、韓国、東海、南海に分布している。



【成長】寿命は約1年で、雌の最大外套背長は41cm、雄は50cmまで成長する。

【成熟】外套背長7～8cm（月齢約5カ月）程度から成熟個体が出現し、外套背長20cm前後（月齢約8カ月）でほぼ半数が成熟する。

【食性】小型の魚類、甲殻類、軟体類を食べる。

## 2 漁業の特徴

【漁法】秋までは主に手釣り、それ以降イカ釣（機械釣）により漁獲される。

【漁期】4、5月から漁獲が開始され、初期には沿岸寄りの水深20～40m付近に漁場が形成され、月を追って次第に沖合へと漁場が移り、秋には水深80～100mの海域が主漁場となる。



### 3 漁獲量と資源状況

2017年のケンサキイカの漁獲量、水揚金額は280トン、3.0億円で、前年より26トン、463万円減少しました。

近年、8月下旬以降に漁獲されるブドウイカ（ケンサキイカの季節型）の漁獲量が減少傾向にあります。

2017年のケンサキイカは、4月から漁獲が見られるなど、本県への早い来遊が確認され、5、6月の外套背長組成は、前年より30cm以上の割合が高い結果となりました。なお、2017年8月の市場調査は、8月末のみ調査結果となったため、ブドウイカの加入が影響し、外套背長10cm台の頻度が高い結果となっています。

ケンサキイカ

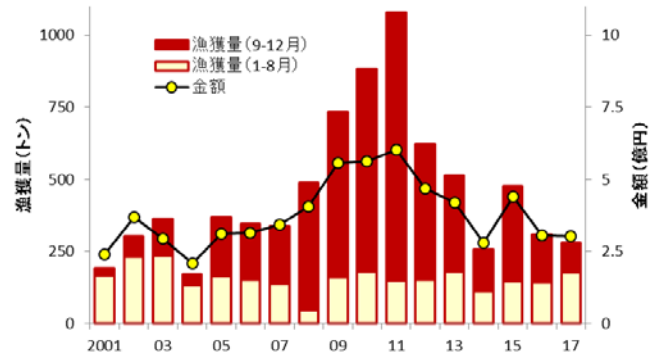


資源状況  
中位横ばい

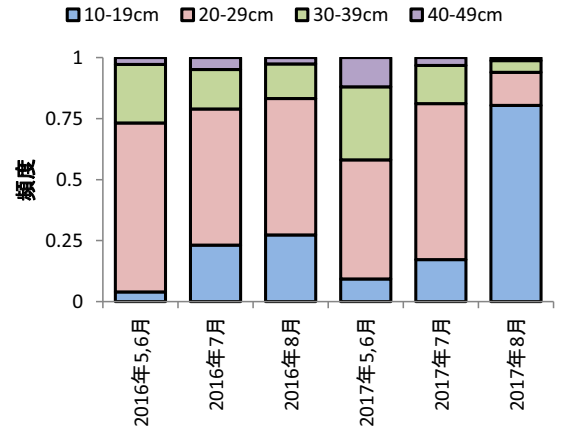
ブドウイカ



資源状況  
低位減少



鳥取県における漁獲量・金額の推移



ケンサキイカの月別外套背長組成

### 4 資源を大切に使うための調査や取り組み

ケンサキイカ（白イカ）は沿岸漁業の生産金額上位5種に入る重要魚種ですが、近年、その漁獲量は減少傾向にあります。これまで水産試験場、栽培漁業センターと共同で、白イカの付加価値向上を目的に、活イカ出荷の技術開発、普及等を行ってきました。しかし、2014年の不漁を機に、県内の活イカを扱う飲食店は、山口県からの購入ルートを構築し、県産活イカの需要が低下しました。

そこで、イカ後進県の鳥取県を売り込み、新たな付加価値向上を図るため、新たな出荷方法によるブランド化を目指して、漁業者の協力のもと、イカの墨袋を除去する技術開発を行いました。2016年には、墨袋除去技術のマニュアル化と講習会等での技術指導を行い、技術普及を図るとともに、試験販売を行い、単価向上効果が確認しました。この結果から、ブランド化に資すると判断されたため、2017年から鳥取墨なし白イカ『白輝姫（しらきひめ）』の名称で販売が行われています。

今後は、ブランド力強化のため、うまみ成分となる遊離アミノ酸等の成分分析を行い、白イカに対する活〆等の効果把握を行います。

